

■ やられても立ち直れる ■

1－3。昨日、本校の野球部は3回戦で敗れた。その試合をバックネット裏で観戦した。何度もつくったチャンスで、あと1本が遠かった。「打てなかったのか、それとも打たせてもらえなかったのか？」の問いに、「打たせてもらえなかった」と、監督。相手選手をリスペクトし、自分のチームの選手は責めなかった。

応援する自校のチームが負けたとき、いつも読み返す新聞記事がある。

122－0。1998年7月18日、夏の高校野球青森県予選2回戦、東奥義塾と県立深浦の試合は高校野球の公式戦史上、最大の得点差試合になった。東奥義塾は1回表だけでも39得点、攻撃が終わるまで約1時間かかった。その後も毎回の2桁得点、7本塁打を含む86安打、78盗塁。深浦は得点どころかヒットさえなかった。

深浦の工藤慶憲監督(25)は、過疎の町の高校で生徒を勧誘。部員10人でやっとこぎ着けた初采配だった。他方、名門東奥義塾の小笠原監督(53)は選手時代に甲子園に出場。「常に全力プレー」を掲げ、母校の復活にかけていた。

試合開始から2時間以上が経過し、選手の疲労もピークに達していたとき、工藤監督は選手に放棄試合にするか尋ねた。9人が「監督さんに任せます」と答えたが、残る1人は「試合を続けたい」と訴えた。深浦ナインは最後までグラウンドに立った。アウトを1つ取るたびに、スタンドからは歓声と拍手が湧き上がった。

試合後、深浦を讃える報道の一方で、「弱いなら出場するな」とのテレビコメントや「東奥も弱い者いじめ」の新聞投書などの批判も起こった。工藤監督は「野球を嫌いにならないければいいが…」と選手をかばい泣いた。東奥義塾の選手たちは3年間教えられたことを忠実に守った。「わざとアウトになればと言えなかった。でも、あれで正しかったのか」と小笠原監督も悩む日が続いた。

試合から数週間。工藤監督はグラウンドに線を引き、部員に言った。「練習を厳しくする。ついてくるやつだけ超えてこい」。1年生全員が超えた。2年後の3度目の夏、敗れはしたが、深浦はシード校から4点を奪った。そして、7度目の夏の挑戦で初勝利をあげた。

当時深浦の1年生だった松岡拓司さんは振り返る。「あの試合は大変だったけど、1人も辞めずに続けたのは監督が好きだったから」。「あの時、逆の立場だったらどうしたか？」という問いに、工藤監督に迷いはない。「間違いなく手は抜かない。やられても立ち直れると、身をもって知ったから」。122失点——。だが、乗り越えてきた者が得た絆は、その分強い。(参考：北國新聞 2008.7.20『やられても立ち直れる』)

全力で当たれば、どのような試合にも意味はある。受け止めて、自らを奮い立たすことができれば、全ての結果に価値がある。何が足りなかったのか、どうすれば勝てるのか。次への自問とともに「心技体」の鍛え直しが始まる。再挑戦の舞台は100回目の記念大会。夏が楽しみだ。